国立国語研究所学術情報リポジトリ

文字習得のふしぎ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-06-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 島村, 直己 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003332

文字習得のふしぎ

言語教育研究部第１研究室　　島村直己

要旨：

子どもの文字習得の研究を行っていると，ふしぎだなと思われる現象にぶつかることがある。たとえば，ひらがなの読みの習得におけるU字型の分布や，漢字習得における画数との関係などである。しかし，本稿では，現在，筆者がいちばんふしぎに思っている文字習得の経年変化について述べることにする。かな文字と漢字について，それぞれ戦後と，戦前と戦後との２つに分けて見ることにする。

キーワード：　かな文字　漢字　文字習得　子ども　経年変化

1　はじめに

子どもの文字習得の研究を行っていると，ふしぎだなと思われる現象にぶつかることがある。たとえば，図１と図２は，10年前に，筆者らが東京都と愛知県の幼児（３・４・５歳児クラス）1,200名あまりを対象にして，ひらがなの読み書き調査を行った結果である。能力調査を行うと，その成績はつりがね型の分布をすることが多いといわれる。しかし，読み書きともに，そのような分布からいちじるしくはずれている。特に，読みの場合，読める者と読めない者との割合が極端に多く，その間がきわめて少ないというU字型の特異な分布をしている。

図1　ひらがなの読字数の分布

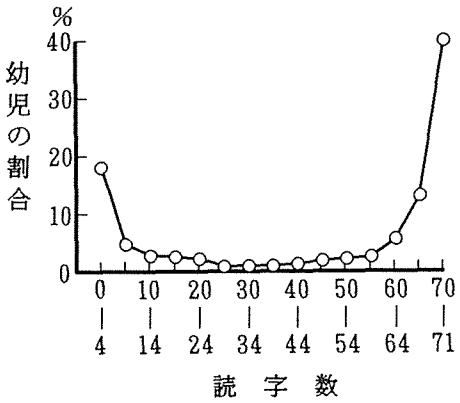


図2　ひらがなの書字数の分布

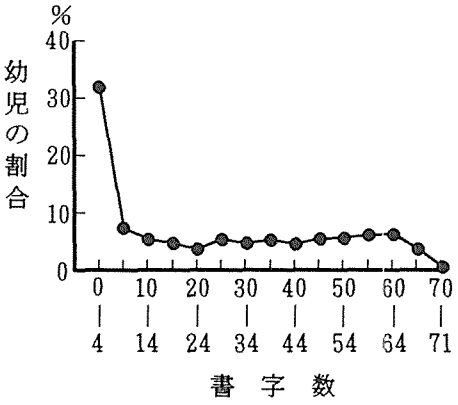
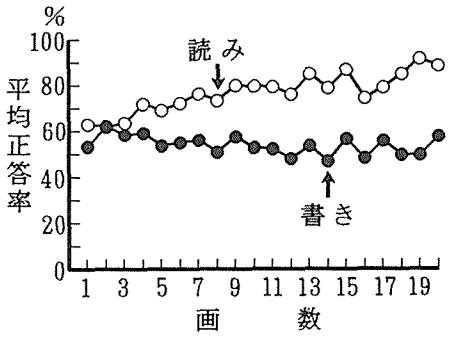


図3　漢字の読み書きと画数



そして，図３は，小学校配当漢字2,000音訓あまりについて，読み書きテストの正答率と画数との関係を示したものである。調査は，15年ほど前に行われたものである。読みの場合，相関係数は，0.1579で，画数が多いほど正答率が高いという傾向がある。しかし，書きの場合，相関係数は，-0.0912で，画数が多いほど正答率が低いという傾向がわずかながらある。どうして読みと書きとでこのように食い違うのだろうか。これもふしぎな現象である。

ほかにもふしぎだなと思われる現象はいくつかあ

るが，本稿では，現在，筆者がいちばんふしぎに思っていることを述べたいと思う。それは，文字習得の経年変化である。以下，かな文字と漢字について，それぞれ戦後と，戦前と戦後との２つに分けて見ることにする。なお，上に述べたことのうち，前者のことに関心のある方は，国立国語研究所『幼児の読み書き能力』（1972年）の第１章第５節第１項に１つの説明が試みられているので，参照されたい。また，後者のことに興味のある方は，国立国語研究所『常用漢字の習得と指導』（1994年）の第１章第４節に分析が行われているので，参照されたい。

２　戦後

２．１　ひらがな

表１は，戦後，小学校への新入学児童および幼児を対象に行われたひらがなの読み書き調査をまとめたものである。この３つ以外に，文部省や地方の教育研究所などで行われたものがあるが，集計の方法が異なっていたり，規模が小さかったりするため，はぶいた。なお，表中，「71文字」とは，清音＋撥音（46文字）・濁音（20文字）・半濁音（５文字）の合計のことである。

表１　ひらがなの読み書き調査の経年比較

	調査年月日	調査校・園	対　象	71文字中読める字の平均	71文字中書ける字の平均
1953年調査	1953年 ４・５月	東京２校 近郊都市４校 農村部３校	６歳児（小学校に入学した児童）	34.8	22.7
1967年調査	1967年 11月	東京・東北・近畿より抽出した幼稚園122園	４歳児クラス ５歳児クラス	33.5 ○53.0	10.8 ○26.0
1988年調査	1988年 11・12月	東京・愛知より抽出した保育所13園・幼稚園19園	３歳児クラス ４歳児クラス ５歳児クラス	18.6 ○49.7 65.9	4.5 ○20.9 44.6

〔注〕　この３つの調査は，それぞれ次のものに報告されている。

1953年調査‥‥国立国語研究所『入門期の言語能力』1954年

1967年調査‥‥国立国語研究所『幼児の読み書き能力』1972年

1988年調査‥‥島村直己・三神廣子「幼児のひらがなの習得」1994年

1953年調査と1967年調査とを比較すると，読みの場合，1953年調査の成績は，1967年調査の４歳児クラスの成績に相当する。そして，書きの場合，1953年調査の成績は，1967年調査の５歳児クラスの成績に相当する。1967年調査は11月に行われたから，４歳児クラスの幼児は就学までに１年半あり，５歳児クラスの幼児は就学までに半年ある。したがって，1953年４・５月から1967年11月までの14年半の間に，幼児のひらがなの読み書き能力は，読みで１年半，書きで半年発達が早まったことになる。

次に，1967年調査と1988年調査とを比べてみよう。読みの場合，1988年調査の４歳児の成績は，1967年調査の５歳児の成績に近づいている。そして，書きの場合も，1988年調査の４歳児の成績は，1967年調査の５歳児の成績に近づいている（これは，保育所児と幼稚園児をあわせた結果であるが，幼稚園児だけを見ると，もっと成績が近づいている）。1967年から1988年までの21年の間に，読み書きとも１年近く発達が早まったことになる。なお，1967年調査では，読みのほうが書きよりも成績が向上していたが，1988年調査では，読み書きともに同じくらい向上しているという違いが見られる。

なぜ，このように幼児のひらがなの読み書き能力が向上したのだろうか。いくつかの推測が行われているが，はっきりとした理由は分からないでいる。

2．2　漢字

昭和20年代（1945～1954年）は，漢字制限の時代であった。1,850字の当用漢字表が告示されたのは，1946年11月16日である。そして，1948年２月16日に当用漢字別表が告示され，義務教育９年間で学習すべき漢字881字が定められた。なお，1947年度使用開始の文部省著作小学校国語教科書の新出漢字数は，684字である。これは，３．２で見るように，戦前の国定小学校国語教科書の新出漢字数と比べると，きわめて少ない数字である。

そしてまた，昭和20年代は，子どもの学力低下が問題となった時期でもあった。「学力の問題については，教師や教育学者よりも先に父母たちが疑問をだしはじめていた。最近の子どもは集会をうまく運営し，さまざまな場で自分の意見を率直に発表できるようになった反面，漢字の読み書きや計算の学力がおち，県庁所在地や歴史上の重要人物などという常識に欠けるという批判であった。問題は，まず読み書き算，つぎに地理や歴史であった。」（太田堯編著『戦後日本教育史』1978年）

その後，小学校で学習する漢字の数は，増大する一方であった。1947年に出された小学校学習指導要領には，学習すべき漢字数は明示されていないが，1951年に出された改訂版では，「国語能力表」が付け加えられ，当用漢字別表を中心とした881字程度が読め，読める漢字のだいたいが書けることと述べられている。その後の小学校学習指導要領は，次のように変遷している。

1958年改訂版‥‥　881字

1968年改訂版‥‥　996字（読み），881字（書き）

1977年改訂版‥‥　996字

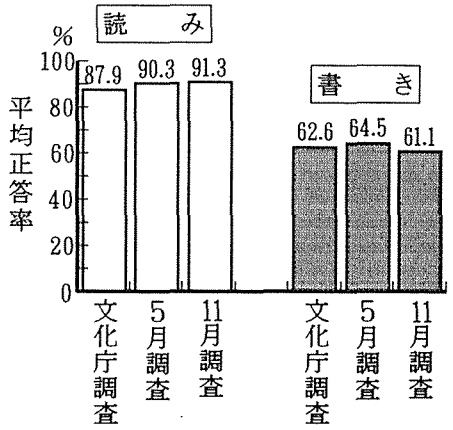
1989年改訂版‥‥1,006字

このような状況であるから，小学生の漢字の読み書き能力（習得率）は低下していると思われるかもしれない。しかし，そのようなことを示す調査はあまりない。わずかに，1975年に日本教職員組合等が行った調査が，漢字の書きの能力の低下を指摘しているだけである（これについては後述する）。

筆者らは，15年ほど前に，小・中学生，高校生を対象に漢字の読み書き調査を行ったことがある。結果は，国立国語研究所『児童・生徒の常用漢字の習得』（1988年）に報告している。この調査の20年ほど前に文化庁が行った調査（文化庁『児童・生徒の読み書きの力』1972年）と比較すると，図４のようになる。ただし，文化庁調査と筆者らの調査とで共通して出題した音訓で，しかも配当学年の変わっていない音訓についてのみの比較である（読み613音訓・書き612音訓）。文化庁調査は９月に行われているが，筆者らの調査は５月のほか11月にも行っている。読みは筆者らの調査のほうがよい。書きはだいたい同じである。また，小学生の書いた作文の漢字含有率を調べてみたら，漢字含有率はだんだんと増大していた。つまり，漢字を多く使うようにもなっていた。

そして，上の日教組調査と同一問題を作成してその結果の検証を行ったが，日教組調査が指摘した漢字の書きの能力の低下という現象は認められなかった。以上のことは，『常用漢字の習得と指導』の第１章第３節に詳しく述べている。

図4　文化庁調査との比較



3　戦前と戦後

3．1　かな文字

戦前の国定教科書期は，カタカナ先習であった。つまり，小学校に入学すると，カタカナをひらがなよりも先に学習したのである。現行のひらがな先習に変わったのは，1947年度からである。これは，公用文がひらがな漢字交じりに変わったことが関係している。戦前の国定教科書期にカタカナ先習であったのは，やはり公用文がカタカナ漢字交じりであったことが関係していよう。なお，この問題については，網野善彦『日本の歴史を読み直す』（1991年）も参照されたい。

戦前に小学生および幼児を対象にして，かな文字の読み書き調査を行ったものに，次のものがある。

① 竹内文路「尋一児童の読方能力」1925年

尋常小学１年生を対象に，カタカナの文章を読ませたもの。読みの速度や理解力等を調べている。

② 林實元「平仮名読字力調査による一考察」1927年

尋常科２年生男子を対象に，ひらがな47文字の読字者数と読字率を調べている。各文字の読字者数にもとづいて平均読字率を求めると，32.1%であった。

③ 大谷啓作「新読本の仮名文字提出機構と其の学習効果について」1935年

国語教科書の新出文字（カタカナ）の読字率を調べている。ただし，どのように調査を行ったのかは，明らかでない。

④ 霧生峯作「就学直前の児童の読書力について」1937年

新入学児童を対象に，カタカナ73文字について，読字率を調べている。各文字の読字率をもとに平均読字率を求めると，58.6%であった。

⑤ 松葉重庸「幼児と文字」1939年

幼稚園児および託児所児を対象に，カタカナ73文字について，読字数を調べている。平均読字数は，幼稚園児の場合，４歳児が24字（32.9%），５歳児が36字（49.3%），６歳児が27字（37.0%）であり，託児所児の場合，４歳児が0.8字（1.1%），５歳児が3.5字（4.8%），６歳児が13字（17.8%）であった。

２．１で引用した1953年調査の読みの成績（平均読字数）は，71文字中34.8字（49.0%）である。②の調査と比べると，1953年調査のほうが成績がよいということになる。なお，カタカナについては，文部省が1952年３月中旬に行った調査がある（文部省『児童生徒のかなの読み書き能力』1954年）。清音＋撥音・濁音・半濁音71文字の小学１年生の平均読字率は，39.2%であった。したがって，④の調査のほうが成績がよい。ただし，国立国語研究所が，1968年２月に，ひらがなの読みをほぼマスターした特定幼児を対象に行った調査では，カタカナ71文字の範囲内で，読みの平均正答率は，93.1%であった（『幼児の読み書き能力』）。

3．2　漢字

1946年３月31日に連合国軍最高司令官に提出された第１次米国教育使節団報告書には，次のように述べられている。「日本の国字は学習の恐るべき障害になっている。･･･（略）･･･小学校時代を通じて，生徒はただ国字の読み方と書き方を学ぶだけの仕事に，大部分の勉強時間をさかなくてはならない。･･･（略）･･･漢字の読み書きに過大の時間をかけて達成された成績には失望する。」

ちなみに，戦前の国定期の小学校国語教科書（読本）の新出漢字数は，次のとおりである（数字は，高梨信博「国語教科書の漢字」（1988年）による）。なお，学習漢字数と国語の授業時数との間の関係については，『常用漢字の習得と指導』の序章第２節を参照されたい。

第１期（1904年度使用開始）････　854字

第２期（1910年度使用開始）‥‥1,360字
第３期（1918年度使用開始）‥‥1,366字
第４期（1933年度使用開始）‥‥1,362字
第５期（1941年度使用開始）‥‥1,301字

このように小学校の学習漢字数は，第１期（４学年）を除くと，戦前は戦後よりもはるかに数が多かったのである。そこから，日本人の漢字力の低下を指摘する人もいる。はたして，戦前の子どもの漢字力は高かったのだろうか，それとも低かったのだろうか。戦前に，子どもを対象に行われた漢字の読み書き調査には，次のようなものがある。

① 森本角蔵「中学校ニ入学セル当初ノ生徒ノ漢字ニ関スル知識ノ調査」1917年

中学１年生79名を対象に，国語教科書（国定第２期）の新出漢字の中から漢数字を除いた1,341字について行った書き取り調査（４月実施）。平均正答数は，1,126字（84.0%）であった。

② 岡崎常太郎『漢字制限の基本的研究』1938年

尋常小学６年生848名，高等小学１年生631名を対象に，国語教科書（国定第３期）の新出漢字の中から漢数字を除いた1,356字について行った書き取り調査（学年末実施）。平均正答数は，尋常小学６年生が692字（51.0%），高等小学１年生が534字（39.4%）であった。

③ 東京市『東京市編読方教育測定』1935年

尋常小学各学年それぞれ1,600名内外を対象に，漢字の読み書き調査を行っている。学年ごとの平均得点は，次のとおりである。（　）内に，満点（１年生は40点，２年生以上は50点）に対する百分率を示す。

	読字テスト	書字テスト
１年生	35.77（89.4%）	35.63（89.1%）
２年生	41.66（83.3%）	35.58（71.2%）
３年生	37.21（74.4%）	26.87（53.7%）
４年生	38.98（78.0%）	26.68（53.4%）
５年生	38.27（76.5%）	24.70（49.4%）
６年生	40.21（80.4%）	24.08（48.2%）

森本調査は，当時の優秀児（東京高等師範学校付属中学校生）を対象としているので，別にする。優秀児でも，この程度の成績であったと見るべきだろう。残りの２つの調査と比較できる戦後の漢字の読み書き調査には，次のようなものがある。

A 日本私学教育研究所『中等学校における漢字書写能力調査』1969年

中学２年生1,911名，高校１年生4,821名，同３年生4,506名を対象にして，当用漢字別表の漢字112字，それ以外の当用漢字88字，合計200字について行った書き取り調査。平均正答率は，当用漢字別表の漢字に限定すると，中２が52.2%，高１が62.2%，高３が74.0%である。

B 文化庁『児童・生徒の読み書きの力』1972年

当用漢字別表881字およびそれ以外の当用漢字の読み書き調査。中学１年生と３年生について読み書きできる漢字の数が試算されている。それによると，当用漢字別表の範囲内で，中１が読み93.7%，書き77.4%の成績で，中３が読み97.3%，書き86.8%の成績である。

C 京都市立中学校教育研究会国語部会「漢字を書く力」調査委員会『中学生の漢字を書く力の調査』1980年

中学１・３年生各300名を対象にして，小学校配当漢字996字の中から漢数字を除いた985字（音1,021，訓686，合計1,707音訓）について行った書き取り調査。平均正答率は，中１が64.55%，中３が76.41%である。

D　国立国語研究所『児童・生徒の常用漢字の習得』1988年

小学１～６年生，中学１～３年生，高校１年生を対象に，小学校配当漢字およびそれ以外の常用漢字について行った読み書き調査。新学期のはじめ（５月）に，学年ごとに前学年の漢字の読み書きテストを行った結果（平均正答率）は，次のとおりである。

	〈読み〉		〈書き〉	
	文字別	音訓別	文字別	音訓別
１年字	93.5	58.2	88.3	54.9
２年字	94.9	69.3	75.7	51.2
３年字	93.2	75.2	67.1	52.4
４年字	93.3	82.0	64.1	55.7
５年字	90.6	80.8	57.6	50.1
６年字	92.0	87.0	60.4	57.4

文字別：どの音訓でもよいからその漢字を読んだり書いたりできた子どもの割合

音訓別：音訓ごとにその漢字を読んだり書いたりできた子どもの割合

岡崎調査と私学調査・文化庁調査・京都市調査とを比較すると，次のようになる。いずれも，岡崎調査よりも成績がよい。出題内容から見て岡崎調査にもっともよく対応するのは京都市調査であるが，岡崎調査と比べるとかなり成績がよい。

岡崎調査	私学調査	文化庁調査	京都市調査
51.0%	52.2%	77.4%	64.55%
小６	中２	中１	中１

そして，東京市調査にもっともよく対応するのは，国語研調査の音訓別の成績である。東京市調査では国語の教科書（第３期）に現れた漢字を難易度順に選んで調査しているが，国語研調査では小学校で学習する常用漢字表の音訓を全部調査している。その中には普通の文章には現れにくい音訓が含まれている。このことを考えると，テストの難度は，国語研調査のほうが高い。結果を比べると，低学年配当漢字は東京市調査のほうが成績がよい。これは，低学年に配当されている漢字に，使用頻度の低い音訓を持つ多音訓の漢字の多いことを考える必要がある。中・高学年配当漢字は，国語研調査のほうが成績がよい。

以上，限られた資料であるが，正答率に注目して戦前と戦後とを比較すると，戦後のほうが成績がよいという結果が得られた。詳しくは，島村直己「戦前の子どもの漢字力」（1997年）を参照されたい。

４　おわりに

戦後，小学校で学習する漢字の数は，増大する一方であったが，本年７月29日に出された教育課程審議会の答申では，変化がおきた。読みの指導は基本的に現行どおりとしているが，書きの指導は（１つ）上の学年までに確実に書けるようにするということが述べられている。しかし，この答申が，どのような現状認識にたって行われたのかは，明らかでない。

広い意味での早期教育の普及，ワープロの普及，漢字検定の普及など，子どもの文字習得をめぐる状況の変化には，はげしいものがある。また，子どもの国語嫌い，作文嫌い，読書離れも深刻である。子どもの文字習得がどのように変化するのか，予測が難しい。

正　誤　表

誤りがありました。お手数をおかけしますが，ご訂正ください。212頁の最後の行です。

誤　　854字

正　　500字